



シニアの音楽能力の可能性 : ピアノ学習と音楽テストを通して

古庵, 晶子

(Citation)

表現文化研究, 6(2):171-190

(Issue Date)

2007-03-23

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81002877>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002877>



シニアの音楽能力の可能性 — ピアノ学習と音楽テストを通して

Potential of Middle-aged and Elderly People of Musical Ability: Through the Piano Learning and Test of Musical Ability

古庵晶子 Akiko Koan

概要

シニアがピアノを学習するのは珍しいことではなくなった。団塊の世代の定年退職も手伝い、学習ニーズに合わせて学習機会も増えた。しかし音楽学習においてシニアの音楽能力にどのような変化があるのか無いのかについては、未だに何も研究されていないに等しい。現在市販されているシニア用のピアノ教材のほとんどは、理論的な裏づけがあるとは言い難く、ピアノ教師たちは個々の経験と思考のなかでレッスンし、シニアたちは何とかピアノが弾けるようになっている状態である。本研究ではシニアが何を求めてピアノを学習しているのか、質問紙による調査をした。それによると、シニアの学習者たちはポジティブにピアノに取り組み、エイジングの進行を遅らせ、音楽能力の発達も期待していることが判明した。

執筆者のもとに通うシニアの学習者がピアノを弾けるようになってゆく過程で、彼らが期待する音楽能力が如何に発達するかについて、ピアノレッスンを受け始めてから約2年の間に3回のテストを行なった。その結果を老年期の認知心理学の理論と照らし合わせてみると、2年という短いレッスン期間のためか、テストの諸設問において、なんらかの傾向を見出すのは難しかった。しかし、発達しているとは言い難い反面、メロディー再認においては設問の課題提示と回答のための判断にかかる時間の長さがエイジングのマイナス面を補い、また音楽経験や進度に関係なく、潜在的な音楽能力を伸ばせる可能性があることが明らかとなった。

キーワード: シニア、ピアノ学習、音楽能力テスト、音文化

Abstract

For middle aged and elderly people, learning the piano has lost much of its novelty now. Their learning opportunity is increasing with their needs. That owes a lot to the retirement of the baby boomers. However there is very little research about change in their musical abilities through their music learning. Most of the piano textbooks for adults are published without enough theoretical support. Therefore most piano teachers give them lessons only based on their individual experiences and thoughts. In the actual situation the middle aged and older people manage to play the piano. According to the result of the survey questionnaire about what they are hoping from their piano learning, I found they are learning the piano positively they are expecting to retard the aging process and improve their musical ability.

I gave my beginner students the tests three times in a period of two years on purpose to know whether they can develop their musical ability as they expect or not through their learning process. Comparing the result with cognitive psychology of senescence, it is difficult to find that kind of tendency though it might be because the tests period was too short. However, I could see that they could judge pitch correctly with more time for presentation on melody recognition regardless of aging. And it became clear that they had some possibility to make progress toward their potential musical ability regardless of their musical experience and degree of progress.

Keywords: *Middle and Elderly, Piano Learning, Test of Musical Ability, Sound Culture*

はじめに

ここ数年、これから定年を迎える団塊の世代や、既に定年後の生活を余裕を持って過ごしている層を対象に、精神的に豊かに充実した生活を送るための取り組みが様々な機関でなされている。例えば昭和37年に始まったNHK教育テレビのピアノ学習番組¹においても、番組内の学習者を子ども→音大クラスの上級者（現在は国際レベルのエリート音楽学生）→中高年の大人の初心者（とりわけ男性）へと変遷を見せており、完全に子ども対象ではなくなった。カルチャーセンターや楽器店の音楽教室などでも成人のピアノ講座は当たり前のようにメニューのひとつとなっている。

10年前に執筆した修士論文では、サークル活動としてピアノ演奏を楽しむ成人の取り組みを調査分析し、その環境や指導者の諸問題およびメセナ活動について考察した。対象を初心者ではなく既にピアノを楽しむ成人にした理由は、まだ世間的には成人のピアノというものが幼少時からの継続行為として捉えられがちだったからであり、成人の初心者の個体数を集めるには、かなり難しいものがあったからだ。

10年後である現在と当時の違いは、成人の初心学習者の増加と共に、成人向けのピアノ学習機会とピアノテキストが増えたことくらいで、成人のピアノ学習・音楽学習についての研究は多少増えた、という程度である。そしてそれらは生涯教育の見地から論ぜられたハード面においての研究であって、器楽学習を通しての音楽的能力についての研究は皆無に近い状態である。成人のピアノ学習者がピアノ教育界においてクローズアップされ始めたのは更に10年前であるから、成人の音楽能力についての研究はほとんど20年間語られずに来ているわけである。

これまで成人の音楽能力発達研究が、ほぼ未開拓の状態になっている理由はいくつか考えられるが、最大の理由はおそらく、成人に音感発達を見出すのは無理であるとされているからと思われる。近年、高齢者のピアノ学習についての研究が発表された²。シニアのピアノ学習研究が皆無と言って差し支えない現況としては、その研究はピアノ学習研究の基盤となるかもしれない。ただ残念なことに、高齢者の特性に触れているというのに、音楽能力について深くは言及していない。

しかし前述のようにこの時代において、中高年の音楽能力の研究が必要な理由は、以下の4点に集約できる。

(1) 裏づけのある教則本づくり

現在出版されている中高年向けのピアノ教則本は、

しかるべき裏付のある音楽能力論や、シニアのその他の特性に基づいたものとは考えにくいものが多い。

(2) 学習者への啓蒙

シニアは、演奏能力や音楽能力の発達が見込めないとの思い込みからか、楽器演奏についてはまだかなりのためらいがある。どのような点が伸びるのかがわかれば、今よりも前向きにはっきりとした希望を持って取り組み、その中で音楽そのものに対する学習者の考え方がより深まるのは明らかである。

(3) 「楽しみ・生きがい」だけに終わらない生涯学習の意義

そもそも器楽演奏を身につけるということは少なくとも10年単位で考えるべき学習であり、「継続」や「鍛錬」などといった行為や、学習形態によっては人間関係のコミュニケーションを通して、精神的な成長も認められるのが学習である。その結果、文化に対してより精神的なものを求める姿勢も増し、学習社会論にも繋がる。

(4) 発達心理学における音楽能力研究の必要性

成人および老年期の発達心理学において、海外で様々な研究データが蓄積されつつあり、日本はまだこの点について後進国である。これまでは成人期・老人期ともに、無理であろうとされてきたテーマにまで研究の幅が広げられ、訓練次第では、可逆性あるいは能力の維持が見られる結果を出している。しかし音楽能力についての研究は若年層についてのもしか研究されていない。実際はシニアたちも楽器を弾けるようになる。その過程において、何の能力がどのように変化するかの科学的な研究がないまま、おそらく経験と主観に基づいて作成・編集されたであろうテキストでは、本当に効果的に学習できるのか疑問である³。生涯発達心理学においては、生涯教育の増進の前にまずシニアの現状や可能性についてもっと研究されるべきだという立場にいる⁴。さらに、「老年研究は緊急度の高いものであり、全てアクション・リサーチの性格をおびることになる」という訳で「Cognitive Gerontology に基づく高齢者の高次脳機能の開発」の正式名称を持つプロジェクトが結成されるなどの動きもある⁵。

本研究の目的

シニアの音楽能力には可逆性があるのかどうか、またそれを測定する方法として音楽テストが有効なのかどうか、本研究はシニアの傾向を探る一事例として、今後に繋げるための下位的研究とする。

研究対象・被験者

本研究は被験者であるシニアを50歳以上に設定す

ることにする。理由については第1章で述べる。

方法論

シニアライフにおけるピアノ学習をその現状と質問紙から分析する。次にシニアの音楽能力について調査するため、ピアノレッスンの実践と共に音楽テストを定期的に使用する。そのため、これまでの経験から得た成人に特に必要と思われる音楽能力として、リズム感や拍子感に重きを置き、標準化されている従来のいわゆる「音楽テスト」を参考に、本研究で使用するテストを作成、使用した。本研究では、以上のように成人の学習者を縦断的に観測するため、ひとまず約2年間で音楽能力の変化をテストで測り、その結果を第3章で分析・考察することにする。

1. シニアのピアノ学習

1.1. シニアの定義

1.1.1. エイジングの視点から

シニアを50歳からとするか60歳からとするかは、いろいろな考え方がある。発達心理学においては、年齢の段階区分を、青年期を20歳頃まで、成人前期を40～45歳頃まで、成人中期を45～65歳頃まで、老年期(成人後期)を65歳頃以降としている⁶。また、老年期を更に65～74歳を前期高齢者、75歳以降を後期高齢者⁷、85歳以上を超高齢者、100歳以上を百寿者など、のちに様々な見地からいろいろな分類をしている⁸。

ピアノ学習においてもエイジングによる視力と反射能力の衰えはじゅうぶん考慮に入れるべきだが、程度の差こそあれ、視力を始め体力の衰えの兆候が現れるのは何もシニアに限ったことではなく、サラリーマンシニア前期⁹と呼ばれる40代においても十分見られることである。その兆候をどこで区切るかは個人差もある。一般的には65歳からを高齢期としている場合が多いようだ。そしてそれはライフスタイルにおいて、昭和61年から実施されている年金受給開始年齢でもある。

1.1.2. ライフスタイルの視点から

一方、ライフスタイルの視点からシニアを捉えるということも、昨今では重要になってきている。1991年の調査では先の「成人中期」あたりについて、45～54歳を定年準備期、55～64歳を定年期、65～74歳を年金生活期、と分類している¹⁰。個々の事情や考え方によって時間的に余裕ができてくる時期、アンチエイジングの視点から脳の活性化のために何かを始める時期、仕事以外の生き甲斐をみつけて老後に繋げようと模索する時期、

それらが定年準備期と呼ばれる50歳代である。とくに2007年は、現在における若者のライフスタイルの基盤や消費文化を作った世代と言える「団塊の世代」が定年を迎える。戦後の教育を初めて受けた彼らは、それまでの世代とはともすれば対極にあり、シニアライフにおいても、アクティブな特徴が顕著に見られるだろうことは想像に難くない。ピアノ教室の門を比較的気軽に叩けるイメージを持ち合わせている。

このような時代では、ライフスタイルの視点からもシニアを捉える必要がある。現在の市場動向としてシニア＝50代以上と捉えられているのは、前述のとおり50代が定年準備期であるのは勿論、団塊世代の大量の定年退職者を経済市場が放っておく訳がないということも背後にある。このことからピアノ学習においても多くの需要が見込まれるのに、供給のほうはハード面ばかりが先立っている。

「はじめに」の(3)で述べたとおり、器楽演奏の習得は10年単位で考えるべきである。50代から始めて、60歳の時点では自分なりの取り組み方ができて、楽しむことができる状態になっているのは、シニアのライフスタイルとして理想的である。これらのことから本研究は被験者であるシニアを50歳以上に設定することにした。

1.2. シニアライフの音楽の位置づけ

1.2.1. 1990年代

高齢者雇用開発協会が1994年に行なった調査¹¹では、定年到達者¹²が定年前にしておけば良かったと思うことのトップ(男35.8% 女32.4%)に「自分なりの趣味を持つこと」、次いで「健康管理や体力づくりに注意する」(男30.5% 女27.9%)、「専門能力・公的資格の取得」(男31.2% 女14.4%)という結果で、その他全ての9項目の10%台を大きく引き離れた。2002年のその調査の第一次報告¹³では、1～3位までが公的資格の取得や専門技術、預貯金などにとって代わられているが、その背景には、健康管理(49%)と趣味(44.7%)に関して、既に準備していたという人々で2位までを占めているという事実がある。

「趣味や娯楽」の同じ調査では余暇・学習活動の開始(再開)時期を質問しているものがある。それによると、囲碁・将棋・マージャンは30.5歳など、頭脳を使うほとんどの活動が30～40代で開始されており、50歳以上のシニア世代となってから始めたものは舞踊、ジョギング・ウォーキング、体操、ゲートボールなど健康管理に繋がるものであった。

音楽の49.1歳というのは、ピアノに限ったことではないので詳細は不明だが、やはり高齢準備期に開始し、高齢前期以降で楽しむような図式が成り立っているようだ。

1.2.2. 2000年代

2000年代は、先の調査当時に高齢準備期であった人たちが高齢前期世代を迎えている。《レジャー白書》¹⁴では、余暇活動91種目について毎年調査を行なっているが、そのうち31種目がシニア化あるいはシニア化予備軍となっている。音楽鑑賞や楽器演奏はその中には入っていないが、ここ数年ほぼ横ばいの状態であるという。インターネットやコンピューターゲームなどが流行し始め、これまでにない選択肢の増加を考慮すると、音楽関係が減ったとは考えにくい。また、先の白書ではシニアマーケティングの先進事例としてヤマハ音楽教室を「リバイバルレジャー」¹⁵のひとつとしてごく簡単にだがり取り上げている。

平成10年と15年では、「生きがい(喜びや楽しみ)を感じる時」の1位が「孫など家族との団らんの時」で、2位は「趣味やスポーツに熱中している時」と順位は変わらないが、1位が48.9%→45.5%で3.4ポイント下降したのに対し、2位が39.6%→42.9%と3.2ポイント上昇している。時間と経済的なゆとりが減らない限りは、団塊の世代で更に趣味活動が今後も増加すると思われる。

また1990年代は、インターネットを「パソコン通信」と呼ぶくらいオタク的な性格が強い。パソコン機器も現在ほど普及していなかったのでデータ比較はできないが、2007年1月14日現在、インターネットで以下の語を検索¹⁶すると、「ピアノ教室」が70万7,000件、「こどものピアノ教室」が1万6,300件、「大人のピアノ教室」が1万2,700件、と子どもの教室と引けを取らない数字が検索された。これらが純粋に教室数を表しているとは限らないが、子どもと大人とが近い数字となっているのは、10年前までは余り考えられなかったであろう。

1.3. シニアのピアノ学習者分析

1.3.1. 初心学習者の特徴

ここでは平均的にシニアの初心ピアノ学習者の陥りやすい点について、指導者としての経験から私見を述べる。

a. 先を急ぐ

成人のピアノレッスン初心者において顕著に見られるのが先を急いで結果を出したがることである。子どもは片手練習を促すとそれのみで次のレッスンまで過

ごすことさえあるが、シニアの初心者は教材が既知の曲である場合が多いので、一通りメロディーの譜読みをしてしまうと、すぐに両手で取り組もうとする。加えて、曲固有のテンポが頭から離れないので、ゆっくり練習することができない。物理的に練習の時間が取れにくい成人の学習者たちは、初心者ほど両手練習を手取り早い最短の練習方法と捉えがちであり、また既知の曲であるがゆえに、早く楽しみたい欲求が先に来てしまう。既知の曲を奏でることを自分の癒しとしていることも一因であろう。またそれぞれの曲のための短い準備練習がテキストに載っていても、それ自体を仕上げるというよりは、弾き方を確かめる程度で終わらせ、どのようにすれば次のレッスンまでに自分に課された事をクリアできるか、指導者が良い方法を説明してもなお自分なりの方法や考え方で判断する。それまで様々な分野で培ってきた経験が却ってマイナス要因となる一例である。当然、先を急いで出した結果は却って時間がかかり、しかも間違っていることが少なくない。

「先を急ぐ」にも、もうひとつの意味を持つ場合がある。執筆者の学習者の例を挙げよう。自宅での自分の演奏に間違いがあることは推測している。しかし何が間違っているのかは自分ではわからない。レッスンで初めて、自分の間違っていることはメロディーそのものや伴奏を加えた両手のリズムの兼ね合いや拍子のとり方であることを知る。指導の結果、正しいリズムで弾けるようになるのだが、何故か納得がいけない。なぜなら間違えないよう集中すると音楽が楽しめないのも、音楽はこんなやり方でいいのだろうかと疑問を感じるらしい。つまり自分が楽しむためのピアノ学習なので、楽しみに到達しにくいと、その時点で「自分には無理」、「難しい」など早期に判断してしまうことがある。特に高齢になればなるほど、1曲に時間をかけている暇は年齢的にないと考えがちである。それではきちんと弾けたことにはなっていない、ということも実はシニアはよくわかっている。

また、シニアは譜読みが苦手だと自分で思っている。覚えられないと思うし、すぐに覚える気力がわからない。だから音符にふりがなを打つ。ふりがなを打つこと自体は問題ないが、問題なのは打つ方法だ。いつまでも新しい曲の音符全てにふりがなを打っていたのでは、譜読みは苦手なままである。

以上のように練習方法と譜読みに見られる傾向は、「先を急ぐ」ために起こりがちなことと思われる。練習方法において子どもも先を急ぐ点では同じだが、記憶学

習の能力が大人より優位な子どもは、いつのまにか短い期間でクリアしてゆく。シニアであるからこそ、手抜きのないコツコツとした取り組み、きめ細かな練習が必要である。

b. 一定の拍子を持続できない

シニアが、楽譜から表面的な事柄を読み取る注意深さは子どもより勝っている。拍子記号を見て何音符が1拍で、どの音符が何拍目か、調号を見て何の音が派生音なのか、どのような楽語や記号が指示されているか、などをよくわかっている。しかし拍子と連動させて楽譜を見るのは不得意で、ビジュアル的なものに頼ってしまう。例えば1ページにおける小節配分のために、他の小節より音符の並び方に空間的余裕がある場合、不必要な休符を入れてしまい、間違いに気がつかない(子どもでもありがちだが、頻度が違う)。リズムも同様で、8分音符や16分音符など細かい音符が出てきただけで、速く弾かなくてはならないという意識だけ突出し、部分的に速く弾いてしまって拍子自体が変わってしまう。その結果、頭の中で拍子を数えているつもりだが、正しい拍子を保持しながらの演奏ができていない。この点は相対的に子どもが勝っている。

c. 片手に気をとられる

前述したとおり、シニアは楽譜を表面的ではあれ注意深く読み、次に何をすべきかよくわかっている。わかっているが指が動かない。エイジングの兆候で反射神経に鈍りが見られ始めているからだ。例えばそれぞれの小節のバスパートの1拍目の音が、いくつかの小節にわたって音階を構成しているのがわかっているにもかかわらず、手が素直に次の小節の1拍目に移動しない。メロディーについては次の小節では隣接音を弾くだけであるが、左手が広い音程へ飛ぶと、つられて右手も離れている音を探してしまう。

d. 鍵盤の位置と雰囲気で弾く

絶対音感保持者の場合、演奏において一音一音何の音を弾いているのかを聴覚として受け止めることができる。しかしシニアの初心者は絶対音感がないと同時に、相対音感も訓練しないことには身につかない。つまり指番号と鍵盤の位置でなんとなく雰囲気弾けてしまっている。だから暗譜をしたほうが楽で、鍵盤のみを見つめて弾く。ただしこの暗譜は楽譜そのものよりも、どのキイを打鍵するかという鍵盤上での暗譜なので、1箇所ミスをすると次がわからなくなりやすい。一方で自分の弾いている音を実音のドレミで(聴くのではなく)考えながらできるシニアは、メロディーを移動

ドで口ずさみながら弾いていることがある。そのため伴奏の音を間違ふことはよくある。それはメロディーと伴奏の2声部を同時に意識しにくい状態で弾いているからである。

以上a～dの点を解消するためには、学習者本人の意識と効果的なテキストおよび指導が必要であろう。テキストの問題については1.4.で述べるとして、シニアの学習者たちはピアノ学習に何を望んでいるか、次の項で質問紙による調査を見てゆくことにする。

1.3.2. シニアのピアノ学習者意識

成人のそれぞれの世代で家庭教育、学校教育、社会教育それぞれの中で受けてきたあらゆる音楽教育には差異があり、慣れ親しんだ音楽も違う。ピアノという楽器に対する思いも世情の移り変わりによって変化してきたように思う。そこで本研究の対象世代となる50歳以上のピアノ学習者に質問紙による調査を行なった。なお、この調査の回答者たちはほとんどが数年以上の学習者であり、初心者は僅かである。

調査実施期間:2006年9月～12月

実施対象:

大阪府高槻市および茨木市:カワイ音楽教室「おとなのピアノコース」

50歳以上65名

徳島県徳島市:四国大学生涯学習講座「思い出の曲を弾こう」

徳島県徳島市:黒崎楽器「ヤマハ大人のピアノレッスン」

高知県須崎市:やました楽器「やました音楽教室」

50歳以上計23名

50代40名、60代33名、70代11名、80代3名

合計88名

なお、今回は女性が圧倒的多数で、性差を分析するには至らなかったため、男女合わせた全体を集計した。アンケートの回答のうち、主なもののみ記載する。表のうち、「無効」としたものは、回答数の制限を越えて回答した数である。参考のため表に載せておく。質問項目は【資料1】を参照されたい。

a. ピアノを習う動機(6項目中ふたつまでマルチ選択)

「①家にピアノがあった」「②ずっと前から習いたかった」「③人に影響された」「④習っている人に誘われてその気になった」「⑤脳や手指の活性化のため」「⑥その他」の6項目の中で、①の物理的条件がどの世代でも1位なのは、シニアとしては妥当なものであるが、①と

⑤との比較で見ると、50代では2倍以上の差があるのに対し、60代では差が縮み、70代(5名)、80代(2名)の各世代では、完全にふたつの理由が同数である。エイジングへの意識の現れで、健康的な生活を送るための手段のひとつとしても考えているのだろう。

b. ピアノ開始における心理

「①弾けるかどうか不安があった」「②音符が読めるかどうか不安があった」の2項目だけで全体の71%(63名)を占め、多くの学習者たちがネガティブな気持ちを抱いて開始した。それでも50、60代のうちの32%(23人)が、「③名曲を弾く自分を想像した」(16名)、「④人に聴かせる自分を想像した」(7名)というポジティブな感情を持った者がいたことは、70、80代にはほぼ見られない特徴である。

c. 開始してからの心理の変化

「習い始める前と後とではピアノ学習に対するイメージが変わりましたか」という質問には、50代と60代で69%、70代の81%、80代は全てが「変わった」と答えた。どのように変わったのかは、全世代を通して「①難しい」(22名)より「⑤楽しい」(27名)が若干多く、「④素晴らしい」が4名、「②思っていたよりは簡単」が1名であった。60代以上は①と⑤はほぼ二分し、50代では「⑤楽しい」と答えたほうがずっと多かった。

「変わった」と答えた者のうち、子ども時代のピアノレッスン経験がある者は、「⑤楽しい」に変化していた者が目立ち、経験がなかった者ほど「①難しい」という結果であった。前者の場合は大人になってから、やっと「(ピアノを)学ぶ」喜びや楽しさを認識できたという、生涯学習のあるべき姿である。いずれにせよ、「③つまらない」「⑥練習が嫌い・面倒くさい」がゼロであり、ネガティブに捉えている者はいなかった。

d. ピアノ学習に求めるもの(目的)(10項目中3つまでマルチ選択)

「ピアノに関して目標や目的がありますか」の質問に76%が「ある」と答えた。世代によって目的の順位【表1】のずれはあるものの、トータルで1位が「③自分だけの世界・楽しみ」、2位と3位は「⑤生活の潤い」と「①ストレス解消・癒し」がほぼ二分した。近年、人々は癒しを求める傾向で、音楽＝癒し、という図式も一般的に浸透しているが、これで見ると、純粋に音楽を楽しむとして考えているほうが多いようだ。生涯学習の要素のひとつである「④生きがい」が意外と少なかった。また、⑦や⑧は音楽を手段に人とのコミュニケーションを図る方法のひとつでもあるが、この表からは彼らは演奏でのコ

ミュニケーションを、あくまでピアノ学習の副次的なものであると考えていることがわかる。

e. ピアノ学習に求めるもの(音楽能力その他)(11項目中3つまでマルチ選択)

【表2】の④について『音楽大事典』によれば、「音感」とは「音の高低などを聞き分ける能力のこと」とされているが¹⁷、一般的にも同じような意味、あるいは絶対音感を漠然と思い浮かべるのが普通ではないかと想定した。「⑥音痴の解消」にピアノ学習が実際に一役買うかどうかは別にして、楽器を学習する者たちが、歌唱能力との関連性を感じているのかどうかを問う意味で挙げた。「⑨知性」は演奏そのものから得る「知」と、学習することで得る音楽全般の「知識」というふたつの意味が考えられるが、どう捉えるかは回答者にまかせた。

50～70代の1位の全てが「①集中力」であった。歳を重ねるごとに集中力の低下を感じるという年配者の発言を聞くことは少なくない。実際、1.3.1.で述べたように、大人にとってピアノ演奏は大変集中力を要するものであり、興味深い数字である。2位以下が「③リズム感」、「⑦表現力」、「④音感」の順になっているのは、学習者たちがメロディーそのものに非常にこだわり、気を取られすぎているのではないだろうか。指導者としては拍子感にも気を配る必要がある。「⑩生活の規律・習慣」がポイントを得ているのも、生活の中にピアノを上手く組み込もうとしている様子が見ええる。音楽能力以外(①②⑧⑨⑩⑪)の総数が96人、音楽能力のみ(③④⑤⑥⑦)の総数が103人、と双方が拮抗しているのは、学習者たちがピアノ学習の相乗効果を期待しているという見方もできるであろう。

f. 継続性

「どのくらいピアノを続けたいと思いますか」の設問に、72名が「①できるだけ長く」と答えている。2年以上継続している者ほど、できるだけ長く続けたいようだ。「②まず半年続けてみる」(1名)「③まず1年続けてみる」(4名)と答えたのは1年未満の学習者である。「④いつやめるか考えている」(3名)のうち、如何にやむを得ない理由であるか、自発的に説明を書いた者もいたので、条件さえ整えば継続したいようだ。この点では子どもの学習者よりも継続性があると言える。ちなみに「⑤数年経ったらやめる」と答えたのは1名であった。

以上のa～fから、シニアはポジティブにピアノに取り組み、継続性も有り、自分の生活のエッセンスとしてピアノを楽しみ、アンチエイジングの効果も期待している。

そして音楽能力発達にも期待を寄せていることが判明した。ピアノを演奏できるようになってゆくのもまた事実である。では一体、シニアたちはどのような点が発達して演奏できるようになってゆくのであろうか。

1.4. シニアのピアノテキスト

1章の最後に、少しだけピアノテキストについて触れる。2006年2月現在、市販されている成人用楽譜のうち、曲集や楽典ではなく教則本としての機能を果たす国内出版ものは、18種類39冊¹⁸となっている。これらは大きく、1) 指導者と共に学ぶタイプの「レッスン型」、2) ひとりで学ぶ「独習型」、3) 指導者の指導を受けたほうが良いが、独習不可能ではない「混合型」、の3つに分類できる。そして、バイエル教則本を編集したもの以外は、シニアの既知の曲でマスターしてゆくものであり、どのテキストにも共通する曲が多い。これは2章でも触れるが、既に持っている知識を活用することで、新しい情報の記憶を容易にし、定着させることができるというシニアの認知機能の特性¹⁹にかなっている。しかしその他の側面については、シニアの特性を生かしたとは考えにくいものが多く、元吉ひろみもその点を指摘している¹。シニアの特性はもちろん、シニアの期待に応え、弱点を克服するテキストとしては不十分であると考えられる。テキストの詳細と分析については、別の機会としたい。次章では、2年間試みた3回の音楽テストの結果を考察する。

2. 音楽テストに見る音楽能力

ピアノには、メロディーと伴奏を同時に1人で演奏するので、単旋律のみを演奏するよりも気を配る範囲が多く、しかも88音ひとつひとつが発音のためのポジションを持っていて、視覚で確認しやすいという大きな利点がある。弦楽器や管楽器のような音程やピッチに気を使う点がないので音感を育てにくいという短所もあるが、初めから用意されているのでシニアにはストレスがないであろう。この研究でこだわったのは、ごく普通に鍵盤楽器を修得する過程で、音楽の三要素(リズム、メロディー、ハーモニー)を感じる能力がどう身につくのか、そしてそれは変化してゆくのだろうかという問題と、標準化された音楽能力テストの内容²⁰を取り入れる、という2点である。ただ今日までの音楽能力テストは、多くが子ども対象であり、成人を対象としたテストもあるが、標準化されるまでの被験者が比較的若い世代なので、シニア対象の研究にはふさわしくない。しかし「音楽能力」

を測定する方法として、それらは評価されていることを無視できないのである。

以上の理由と、リズムや拍子におけるシニアの弱点から、本研究で扱う音楽能力は、次に挙げる3点に絞った。

- ①音感: 単音同士、および和声において、音の高低を判断できるか
- ②リズム感: 正確にリズムを判断できるか
- ③拍子感: 拍子を感じることができるか

表1 「ある」と答えた方、どんな目的(目標)ですか

	50代	60代	70代	80代	計	無効
①ストレス解消・癒し	21	14	4	0	39	2
②自己実現	5	3	1	0	9	1
③自分だけの世界・楽しみ	20	22	4	3	49	2
④生きがい	6	5	1	1	13	2
⑤生活の潤い	23	9	7	1	40	2
⑥舞台上で発表したい	1	1	0	0	2	1
⑦誰かと一緒に音楽を楽しみたい	7	3	1	0	11	2
⑧歌や楽器の伴奏をしたい	1	2	0	0	3	2
⑨ピアノを教えるようになりたい	0	0	0	0	0	0
⑩その他	1	1	3	1	6	0

表2 ピアノを習うことで、何を身につけたいですか あるいは何が身につくと思いますか

	50代	60代	70代	80代	計	無効
①集中力	21	23	5	1	50	1
②がまん強さ	2	4	2	0	8	1
③リズム感	20	10	4	1	35	2
④音感	12	9	3	2	26	2
⑤拍子感	6	5	1	0	12	1
⑥音痴の解消	1	0	0	0	1	1
⑦表現力	13	15	1	0	29	1
⑧積極性	2	6	1	0	9	2
⑨知性	4	1	0	0	5	2
⑩生活の規律・習慣	9	7	1	0	17	2
⑪その他	4	3	0	0	7	1

2.1. 内容

先に述べたような3点の音楽能力を踏まえ、標準化されている音楽能力テストのうち、5つの音楽テストの内容【表3】²⁰に準拠して今回のテストを作成した(詳細は【資料2】参照)。音程の変化については生のアコースティック音にこだわるという視点で、執筆者がアップライトピアノ又はグランドピアノを鳴らし、リズム変化についてはピアノ本体の一部などを叩くという原始的な方法を取った。これらはできる限り普通のピアノレッスンと同じか、あるいはそれに近い耳慣れた音、普通のピアノレッスンでおそらく多くのピアノ教師がしているであろう、学習者たちに拍子やリズムを示す手段としてのリズム音という条件で、刺激(テスト音)を被験者に与えるためである。また、音程の提示については1秒とし、提示音と比較する提示音の間はあえて継時的にはせず、2秒のインターバルを置いた。演奏する楽曲ではノンレガートや休符によって響きが遮断されることが当然出てくるので、被験者が演奏する立場として、どのような状況であっても高低を判断できるかどうか、という視点に立つものである。

2.2. 被験者について

被験者たちは、学校法人大阪繊維学園公開講座「ピアノを弾こう」²¹を受講するうちの8人【表4】である。ピアノレッスンを初めて受け始めたかそれに近く、年齢構成は50代前半から70代後半までである。年齢設定を50歳以上にした理由は第1章で既に述べたとおりである。

なお、必要に応じて比較するため、その他の受講生や執筆者の自宅教室の学習者たちのなかから、8人と同世代で子ども時代の経験がある者、同世代でピアノを始めたばかりの者、30代、40代でピアノを始めた者、子ども時代の経験がある20代など、合計8人【表5】にもテストを1～2回実施した。

2.3. 方法

このテストを、2004年10月から2006年8月のあいだに3回実施した。テスト間の期間は一定ではないが、初回レッスンから3回目のテストまでに、それぞれ半年以上の間を空けている。講座の開催場所が学校の音楽室という物理的事情により、2回目は隣の教室からブラスバンド部の練習音が聞こえてきてしまい、テストに良い環境とは言えなかったが、1回目と同じ場所で同じピアノを使用した。講座終了後に行なった3回目は、外部からの騒音のない休日の公立中学校の音楽室を使用した。それぞれの設問に入るたびにまず方法を説明し、全員が要領を理解できたのを確認してから、設問番号1-aと1-b(【資料2】参照)については各設問全て2回ずつ繰り返し、その他は1回ずつ提示した。2回目のテストのみ、悪条件の環境のため4の拍子判定以外の設問を2回ずつ提示した。配点は各設問一律1点とし、設問番号4の拍子判定については2拍子と4拍子の違いが判別できなくとも、どちらかの回答をしていれば1点、判別できれば2点とした。3拍子は実際にはゆったりした6拍子の曲を用いた。合計44点満点とした。「高い」「低い」

表3 標準化されたテストと作成テストの相関

テスト名と採用項目	作成テスト	内 容	
マナリング音楽能力テストより「音高」	2音間の音高変化	1度から7度および1オクターブと6度における音高変化	
ウイング音楽的知能標準テストより「音高変化」	2つの三和音における内声部の音高変化	基本形	長三和音→短三和音、短三和音→長三和音、長三和音→sus4
		第1転回形	長三和音→増三和音
		第2転回形	長三和音→減三和音
ウィッスラー＝ソープ音楽適正テストより「音高再認」	音高再認	メロディーの中で、ある一音の頻度は何回か	
	音高再認	メロディーの最終音は開始音より高いか低い	
ウィッスラー＝ソープ音楽適性テストより「メロディー再認」 ガストン音楽性テストより「音の項目」	メロディー再認	奏される2つのメロディーが同じか違うか	
シーショア音楽才能尺度	リズム再認	奏される2つのリズムが同一かどうか	
	楽曲の拍子判定	ピアノ曲の拍子判定 (2拍子、3拍子、4拍子)	

「同じ」などの文字だけ並ぶ答案用紙に、被験者がマルをつけて答える方法をとった。

2.4. レッスンについて

初めて受けた8人は、半年～2年のグループレッスンから始め、公開講座終了後のテスト3回目の時点では、全員が個々の意思で執筆者の自宅での個人レッスンに切り替わっている。グループレッスンではレベル別に2クラスに分け、毎回それぞれのクラス全員で同じ課題を学習し、宿題もほぼ同じものを練習した。教材は以下の5点の特徴を持つ市販テキスト²²を主要テキストとした。

- ①学習者たちにとって既知の曲ばかりで取り組みやすい。
- ②始めから大譜表を用いて両手を使い、単旋律→ユニゾンで旋律演奏→右手で旋律+左手で簡易伴奏、という展開が、学習過程を把握しやすい。
- ③簡易なコード奏法を採用し、同じ曲で2通りの伴奏型を練習できる応用性がある。
- ④3冊構成にして1冊のページ数を減らしているので、学習者が達成感を得やすい。
- ⑤比較的音符表示が大きく、シニアにとって見やすい。

このテキストに加え、被験者たちが苦手とする譜読み練習やテクニック補充のため、執筆者が作成あるいは市販の楽譜を編曲したプリント楽譜を、主要テキストの単元内容に合わせてその都度使用した。そのほか半年毎に計2～4回、それぞれ被験者の希望曲(市販楽

譜を執筆者が簡易に編曲したものや、普段のテキストの中からの曲)をステージで発表する機会を持った。グループレッスンでの使用楽器は1人につき電子ピアノ1台、全員につきアップライトピアノ1台で、1人1人アップライトピアノで10分程度の短時間個人レッスンをするこもあった。被験者たちは自宅にアコースティックか電子どちらかのピアノを所有、使用している。しかし、テスト内容はタッチには係わらないので、ピアノの発音方法の違いは余り関係ないと考えている。

グループレッスンの特性から、進度は全員一定にしたが、実際には同じ曲を弾いていても、完成度に個々の差があるのは言うまでもない。そしてテキストの進度がテスト結果に反映しているとも断言できない。被験者たちの進捗や経験はあくまで参考として述べている。さらに前述のとおり、テスト3回目の時点では既に個人レッスンになっているので、被験者それぞれの進捗に当然差が出てきている。彼らはピアノ指導を受け始めてまだ2年半であるため、個々の進捗は考慮しないことにした。そのため、読譜を伴う器楽演奏を生活に取り入れるようになった彼らに、音楽能力の変化があったかどうか、そしてそれはテストで測れたのかどうかを今回は見てゆくことにする。

2.5. 得点の変化

2.5.1. 各設問の結果と傾向

a. 2音間の音高変化(設問番号1-a)【図1】

全10問。7度以上離れた音程は上行下行とも、全員

表4 初めてレッスンを受けた8人

	テスト1回目時点のピアノ経験	テスト1回目時点の演奏レベル
50代前半女性A	大学時代にバイエルの経験あり	バイエル中程度
50代前半女性B	全く初めて	全く初めて
50代前半男性A	全く初めて	全く初めて
50代後半女性A	6ヶ月目 コーラスもしている	バイエル初程度
50代後半女性B	大学時代にバイエルの経験あり	バイエル初程度
60代後半女性A	全く初めて	全く初めて
70代前半女性A	3年目 コーラスもしている	バイエル中程度
70代後半女性A	独学で約40年	ソナチネ ～ソナタ程度

表5 比較対象の8人

	テスト1回目時点のピアノ経験	テスト1回目時点の演奏レベル
20代後半女性A	子ども時代の経験あり	バイエル中程度
20代後半女性B	子ども時代の経験あり	ソナチネ程度
30代後半男性A	4年目	ソナチネ程度
40代後半女性A	8年目	ソナチネ程度
40代後半女性B	11ヶ月目	バイエル中程度
50代前半女性C	子ども時代の経験あり 8年目	ソナチネ程度
50代前半男性B	全く初めて	全く初めて
50代後半男性A	5ヶ月目	導入程度

がほぼ3回通して全て正解した。4度下行も全員3回全て正解した。5度上行では不正解が1回目3名おり、2回目で2名、3回目で不正解者がなくなった。3度上行は不正解者が1～2名、2度になると長2度上行は1～2名不正解であるのに対し、短2度下行が1～4名、短2度上行においては常に4～5名不正解し、3回とも不正解が続いている者が4名もいた。3回を通しては、1名が成績が向上し、3名が後退、その他は得点の差こそあれ、結局は維持している。これらの結果から、音程が狭いほうが聴き取りにくいと判断でき、短2度上行のほうが下行よりも聴き取りにくい傾向が見えるが、断定はできない。

b. 三和音の内声の音高変化(設問番号1-b)【図2】

ふたつの三和音を鳴らして、中声部のみを2度上行あるいは下行させる問題で全10問。非常に難しい問題かと思われるが、メロディーや伴奏部で和音を弾くとき、和音構成音のひとつをその時だけ間違っても、気がつかないシニアが意外と多いと思われるので設定した。中声部の動きが長2度の場合、上行のほうが下行より正解率は若干高かった。第1転回形から中声部が長2度上行して第2転回形になる変化よりも、sus4から中声部が短2度下行して基本形となる変化のほうがより音が密集していて、やはり聴き取りにく

かったようだ。この場合は設問番号1-aで見られたように上行のほうが聴き取りにくい、という傾向が当てはまらない。8人が3回テストを受けたことから計算した延べ人数でのそれぞれの設問の不正解率は29～58%で、10問中4問が50%を超え、別の4問が30%前後、全問正解者は皆無だった。3回続けて正解の設問がひとつ以上あった者のうち、最高数は3名の4～5問で、他の3名が1～2問であった。個々の延べ正解率は83% (50代前半女性)を筆頭に、76% (50代前半女性、50代後半女性)、53% (60代後半女性)、50% (70代前半女性)、46% (50代後半女性)、40% (50代前半男性)、36% (70代後半女性)であった。三和音という密集した響きの中の中声部が2度しか動かないことに加え、ほとんどの者がスリーコードでメロディーを弾くスタイルの曲を学習中で、和音の構成音の聴き取りが難しい点もあろう。比較対象の8人の結果と比べてみたが、ピアノ開始から1年未満で同じテキストを学習している40代後半女性は、10問中9問正解で、ピアノ4年目でソナチネを学習中の30代後半男性は4問のみ正解であった。このことから音楽経験の有無や進度は余り関係ないことがわかる。年齢についてはもう少し様子を見たほうが良いかもしれない。また、3回目ほど良くなるという訳でもなかった。

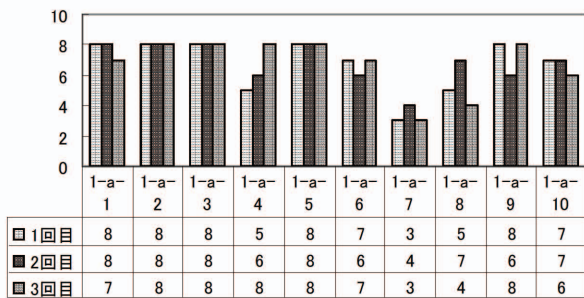


図1 設問番号1-a 2音間の高低変化

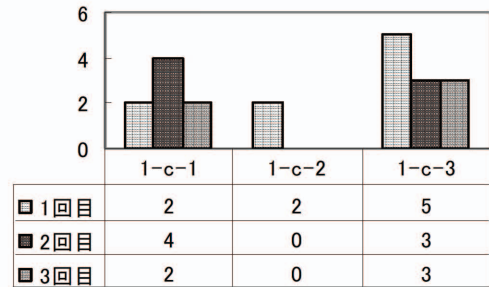


図3 設問番号1-c フレーズの中における同じ音の数

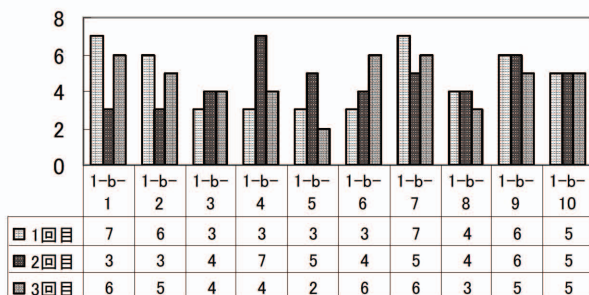


図2 設問番号1-b 2つの三和音における内声の高低変化

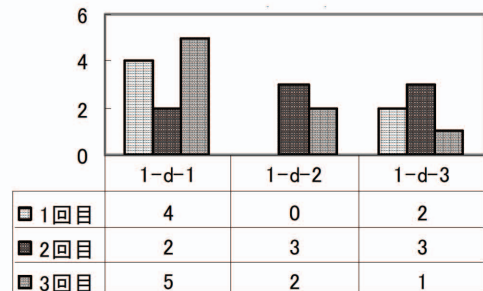


図4 設問番号1-d メロディーの中のある音の数

図1～4の数値は正解者数を表す。

c. 音記憶(設問番号1-c)【図3】と(設問番号1-d)【図4】

2種類3問ずつ行なった。(設問番号1-c)は5つの音の羅列から、同じ音を探す設問、(設問番号1-d)は初めにある1音を与えたあと、続いて奏されるメロディーにその1音がいくつあるかを問う設問で、1-dは3問全て馴染みのある文部省唱歌などから引用した。1-cも1-dも全て答えられなかった者は多く、それぞれ全体の延べ正解率は両方とも30%であった。また、成績のパターンとしては、1-cも1-dも同じくらいの(不)正解数、1-c(音の羅列からの判定)のほうが正解数が多い、1-d(馴染みのあるメロディーからの判定)のほうが正解数が多い、と違いが3通り出た。設問ごとの結果は、1-cではほぼ順次進行型のメロディーが正解率が低かった(8%)。1-dで正解率が一番低い(21%)ものは、他のふたつのメロディーが4分音符や8分音符のリズムで構成しているのに対し、付点音符も含まれているので、初めに与えた音と開始音と同じであるにもかかわらず、難しかったようだ。これらも年齢や音楽経験の有無や進度は余り関係なく、むしろ3回目では正解数が落ちている。

d. メロディーの開始音と最終音の音高変化(設問番号1-e)【図5】

全3問。メロディーにおける音高変化については、馴染

みのあると思われる外国曲と日本歌曲の出だしの4小節を用いた。これらは実際の曲では4小節の後に再度ほぼ同じフレーズが繰り返されることから、最初の音と同じ音が後続するのでわかりやすいはずだが、成績から見ると被験者たちがそれに気づいたようではなかった。これは被験者たちが普段から楽曲の構成を意識して聴いたり歌ったりということがないということになる。楽譜を目の前にすると、どのフレーズが同じであるかなど、構成の上でそれなりの分析ができているので、意識して演奏するようになれば、この設問の回答数は上がると思われる。

e. 二重音の音程変化(設問番号1-f)【図6】

二重音をふたつ与えて、後のほうは前よりも音程が広がったかどうかを問うた。全3問。4度($g^1 - c^2$)→7度($f^1 - e^2$)、6度($f^1 - d^2$)→3度($a^1 - c^2$)、5度($c^2 - g^2$)→2度($d^2 - e^2$)と、全てその差を3度にし、上声部同士と下声部同士の移動の組み合わせが3度上行とそれぞれ順に2度下行、2度下行と3度上行、3度下行と2度上行、の3つを提示した。一見同じような条件だが、設問順に正解率は71%~42%となった。7度は離れているので聴き取りやすく、3回全て正解した者が4名おり、あとの者は必ずどこかの回で正解している。6度→3度は、6度が物理上も周波数比上も離れているので聴き取りやす

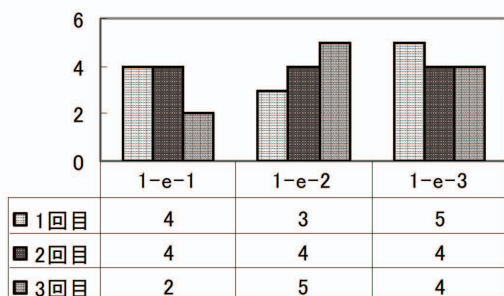


図5 設問番号1-e 開始音と最終音の高低変化

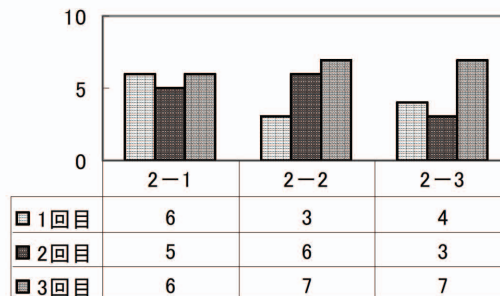


図7 設問番号2 メロディー再認

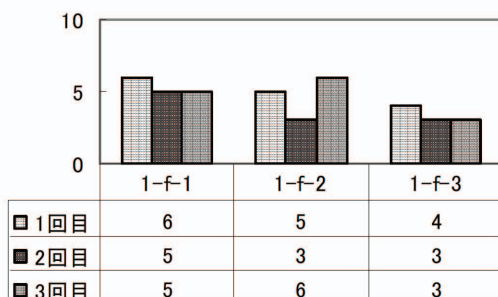


図6 設問番号1-f 2重音の音程変化

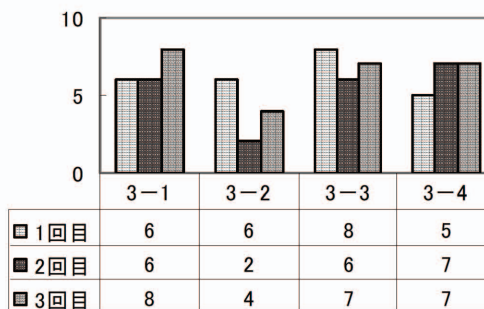


図8 設問番号3 リズム再認

図5~8の数値は正解者数を表す。

いと想像したが、全回正解した者は2名、毎回不正解だったのが1名いた。5度→2度については2度に狭さを感じられると想像していたが、回を追うごとに正解数が落ちている。ピアノを学習しても持っている音感はさほど変わらない、ということと言えるかもしれないが、弱くなるということはないだろう。今後のテスト次第である。

f. メロディー再認(設問番号2)【図7】

全3問。ふたつのメロディーが全く同じかどうかを問うものである。使用したのは執筆者の作成あるいは編曲したもの2曲と、既成ではあるが知られていなさそうなもの1曲で、メロディーが全く同じでない設問2曲は、メロディー構成音のうち1音ないし2音を、短2度か長2度に変化させた。3回とも全回正解だったのは3名で、それ以外の全員も辛うじて3回目の成績が一番良かった。能力が伸びたかどうかを断言はできないが、やはり2度音程の変化は大変難しいことだけは確かである。

g. リズム再認(設問番号3)【図8】

全4問。1-eの設問は集中力を要するが、これは楽音でないだけに更に集中力を要する問題であろう。回が進むごとに得点はほぼ横ばいか上がっているが、1問だけ下降している。この下降した問題の答えは「ふた

つとも同じ」なのだが、初めから違うリズムだと思い込んで聞いている者がいるからで、テストを重ねれば結果が変わってくるものと思われる。

h. 拍子判定(設問番号4)【図9】

2拍子、3拍子、4拍子の曲順に3問出題した。配点は3拍子が1点で、4拍子と2拍子はそれぞれ2点にし、4拍子を2拍子、2拍子を4拍子と答えた場合は1点にした。その理由は、これまで音楽を漠然と聴いてきたであろう被験者たちが、ピアノを始めてまだ日が浅いのに、2拍子と4拍子の区別が付くなら、潜在的に感覚を持っているからである。そのため個人の得点推移を見ることにした。3問合計5点で、グラフの数字は3問の合計点である。合計点が4点の者は、2拍子系が正解したものが含まれていることになる。この設問は、被験者たちがどれだけ正解したかよりも、どんな間違いをしたのかということに着目したほうが、重要と思われる。

このグラフではわかりにくいのが、全員がテスト全3回のうちのどこかの回の、いずれかの設問で2拍子と4拍子を逆に答えている。3拍子は実際にはゆったりしたテンポの6拍子を更に遅くしたものだが、4拍子に間違える者がほとんどで、6拍子の持つ大きな2拍子には感じていないことになるので、2拍子系か3拍子系かという基本的

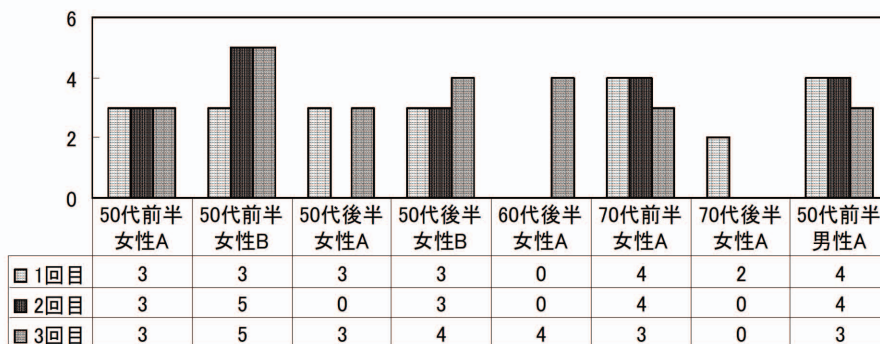


図9 設問番号4 拍子判定

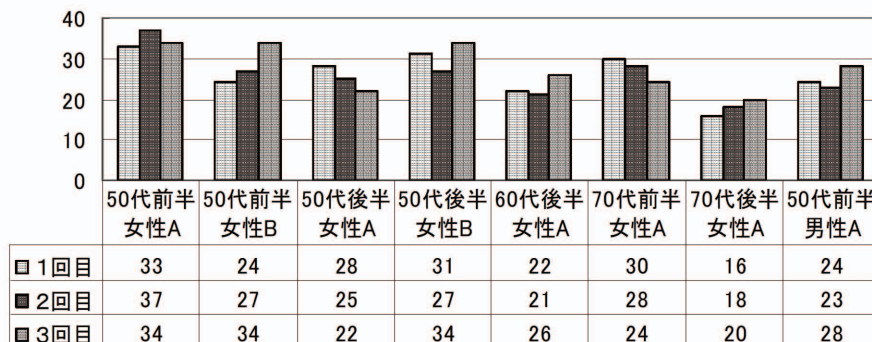


図10 音楽テスト得点推移図

図9、10の数値は得点を表す。

なところで間違っていると思われる。2拍子は速いマーチ、4拍子は簡易なジャズのウォーキングベースの曲で、これらを50代後半と60代後半、70代2名の4名が3拍子と答えた。実際のピアノレッスンで演奏中に拍子の伸び縮みが起こっても、自分では気がつかないで弾いていることが少なくない被験者たちである。学齢期に受けた音楽教育の違いも影響しているかもしれない。演奏において拍子はリズム以上に無視できないので、レッスンで身につけるべき感覚である。これらは今後のテストの積み重ねで変化が現れるかもしれない。

2.5.2. 総得点

8人の3回のテストにおける総合得点推移は【図10】のとおりである。

それぞれを見ると、回を追う毎に得点を上げてゆく者2名、3回目が2回目より下がったが1回目よりは上がった者1名、2回目に一番得点が少なかった者3名、回を追う毎に下がった者2名、の4パターンの結果が出た。

8人という小人数ではこの結果から一般化した答えを出すわけにはいかないが、とりあえずこの結果から見られるのは、2人を除いた全員が3回目には1回目よりも得点を上げている点である。テストに慣れてきたのももちろんあるだろう。3回目で得点を下げた2人は、長年コーラスをやっていたり、学生時代に必要があつて僅かに経験がある、という被験者たちで、音楽演奏について全くの初心者ではないのに得点を下げた、という点が気になる。

個々の得点についてであるが、70代後半女性の場合、長年自己流でピアノを弾いていたせいか、ピアノソナタの読譜ができるほど指も動き、読譜のペースも比較的早いのだが、独学がゆえに理論やソルフェージュ的なものが抜けていた結果、8人中際だつて得点が低かったと考えられる。50代前半女性Bは全くの初心者であるが、以前にピアノを経験していたりコーラスをやっている50代前半女性Aや50代後半女性Aたちに、3回目で同じ得点に追いついている。

3. まとめ

3.1. 音楽能力と成人発達との関連

3.1.1. 音程・音高変化に見る関連性

音高の違いを聴き分ける能力は、ヒトの内耳にある蝸牛の基底膜に音が振動となって与えられ、振動の起こる場所によって音高(周波数)を判断できるという「場所説」と、内耳神経の興奮頻度によって周波数が決ま

り、音高を判断する「頻度説」のふたつが有力とされる²³。3種類のテストから、違う音同士が一番狭い音程である2度音程の変化を把握しにくい、ということがわかった。2度のような狭い音程では周波数の差も狭いので、興奮頻度や振動場所の違いも差が小さいといえる。これは内耳機能の加齢変化が2度音程を聴き取りにくくしているという見方ができる。

3.1.2. 音記憶に見る関連性

提示される音と音の間に別の音と時空間があると、その時間の長短と間にある別の音次第で聴覚が左右されることを聴覚的タウ効果 (auditory tau effect)²⁴ という。今回のテストはメロディーや不規則な音の羅列の中で同一音を探すものであから、当然、同一音の間には空間(=休符)どころかいくつもの音がある。それによって最初の提示音を忘れてたり、楽音の羅列それぞれの音程が知覚できなくなるのであろう。この場合絶対音感が相対音感があれば難なく答えられるはずである。例えば絶対音感を身につける過程にある幼児にメロディー聴音をする場合、休符のないメロディーだと難なく音名を答えられるが、初めて休符が出てくると、途端に聴き取れなくなる幼児が少なくない。ただし、訓練を重ねると絶対音感が身につくので、そういったトラブルはなくなってゆく。今回のテストは微妙なピッチの差はなく、階名のカテゴリーのなかで判断できるものである。シニアの場合は、相対音感をつけることでクリアできたと思われる。

3.1.3. メロディー再認に見る関連性

全員が3回通して成績を辛うじて上昇させたことは、ある一音のみに気を配る音高変化と違い、メロディーの流れとして受け止めると聴き取りやすくなるということだろうか。これは彼らが演奏中にメロディー音にミスがあると必ず認識できて、正しい音に弾きなおすことと似たような現象のように思う。知らないメロディーでも、4小節なら集中して聴けるということになる。これは、その場で提示された情報を再び取り出すことができるかどうかという感覚記憶であり、また短期記憶と考えられる。短期記憶の処理速度は加齢と共に遅くなるが、訓練などにより若年層との差が無くなるとされている²⁵。つまりシニアの学習者にとっては、提示と記憶の取り出し方に時間さえかければ、加齢は無視できるであろう。事実、テスト3回目は1回目に比べメロディーをゆっくり提示した結果である。

3.1.4. リズム再認に見る関連性

2.5.1.のgでも述べたが、答えが「同じ」の設問の正解率が低下しているのは、「違うリズムに違いない」と構えて聴いているからと思われる。リズム再認もメロディー再認と同じく短期記憶であり感覚記憶だと思われるが、残念ながら今回は傾向が読み取れず分析ができない。更なるテストの実施で傾向が見えればと思う。

3.1.5. 拍子判定に見る関連性

1回目は被験者たちが曲に聴き入ってしまい、拍子を判定するところではない様子であった。2回目、3回目はそういったことはなく、曲に合わせて手や頭を動かして確かめる者もいた。単なるタッピングに関して、拍子に反応できるかできないかは年齢に関係なく、幼い頃からピアノを習っている、メトロノームに合わせて手を叩けない子どもがいる。拍子そのものは、タッピングが正確にできても2拍子と3拍子を間違える場合があるので、これは若年時分の教育と本人の素質によるところが大きいのではないかと思う。拍子を感じて演奏する習慣がつけば、多少変わるかもしれない。3.3.で触れる結晶性知能のひとつだと思うが、もう少し時間をかける必要がある。

3.1.6. 個人の総得点の伸びに見る関連性

2.3.で触れたように、2回目のテストは予測不可の事態で、環境的に他の回と同じ条件にすることができなかったため、被験者たちが集中して、それぞれが本来持つ感覚での判断ができたとは言い難い。そこで1回目と3回目の結果のみを見たとき、3回目のテストの点が上がった者が6人になる訳だが、ほとんどが僅か3ポイント前後の伸びに留まり、音に対する判断能力が上がったとは言い難い。しかし、回数ごとに順調に点数を上げ、結果10ポイントも上げた50代前半女性は、長年のコーラス経験者と肩を並べる点数となった。50代女性の一般的な傾向としては言及できなくとも、少なくともこの学習者に関しては、ほぼ毎日ピアノに触れることで、潜在的に潜んでいた音感やリズム感を呼び覚ましたのだと考えられる。音感とすぐに結びつける訳にはいれないが、シニアの技能学習においては訓練がまだ効を奏すことやその可逆性について、シャイエらによる、加齢による知能の変化は不可逆性が低下するのではなく、不使用の知能が低下する²⁶ことと関連付けることはできそう。

3.2. テストの有効性と今後の課題

シニアに音楽テストを使用する際、シニアの特性から、提示する音の回数や提示時間、および被験者が回答にかかる時間をもう少し増やすことによって、正確な能力測定ができるのではないかとの印象を受けた。また、音のテストに不慣れな被験者たちの心理状態を考え、あえて生のサウンドで実施したが、そろそろ慣れてきたと思われるので、録音された音源を使用することが今後の課題となる。また、子どもに聴音課題を与える際、子どもが聴き取れなかったフレーズを、テンポを遅くしたり、休符をタイにして継時させて再提示すると、正しく判断できるものだ。今回のテストの音高判定において、2秒のインターバルがシニアにとって適当かどうかは、今後更なる研究に委ねられるであろう。

今回のテスト作成においては、若年時の訓練でしか身につかないことをなるべく避け、曲を理解し演奏することにおいて必要最低限のことを設問した。しかし明確に傾向を分析できるような答えを得ることができなかった。総体的に大人の進捗はかなり時間がかかるので、まだピアノレッスン開始から2年半もたない時期では傾向を読み取るのが困難であった。しかし標準化されたシニア向けの音楽テストがない現在、テストまでのレッスン期間を長く取り、テストを少しずつ修正してゆくことで僅かでも変化を見出したい。

3.3. 全体を通して

情報処理の速度とその問題解決に関する流動性知能と、それまでの蓄積された経験と知識による能力である結晶性知能、以上の観点から成人発達が理論付けされている²⁷。前者は加齢に伴って低下し、後者は少なくとも70歳近くまで発達するという。シニアのピアノ学習に当てはめると、楽譜の知識と音の関係、発音のための楽器構造、など新しく得る知識や、瞬時にそれらを結びつけるものが流動性知能で、子ども時代に受けた音楽教育や先天的な音楽感覚、人生の中で聴覚から得た様々な音のパフォーマンスを基盤とするものが、結晶性知能だと執筆者は理解している。こういったことやテストの結果を考えると、シニアのピアノ学習において変化や傾向を探る場合、シニアにみられるのは新しい変化ではなく、潜在的に持つ音楽能力に活力を与えるという変化ではなからうか。成人の発達心理学は研究が進むにつれて、それまで子どもと青年期を対象にした分析方法が、成人には考えられなかった範囲にまで広げられるようになった。そして衰退が見られず持続す

るものもあるということが明らかとなってきた。短期記憶はその記憶の仕方に意味合いを持たせれば、シニアも若者と同じ成績を出すことができるという。短期記憶を貯蔵し、長期記憶に変えることも可能であるから、シニアも暗譜ができることや、工夫次第で演奏に必要なことを身につけてゆくことができそうだ。その他訓練によって、シニアも潜在的な音楽能力なら伸びる点があるだろうことが想像される。

今後の研究課題として、市販テキストの更なる詳細な分析が必要であるし、子どもだけでなくシニアのピアノ学習においても、リズムの要素を取り入れる効果についての考察などが考えられよう。また、音楽テストを通してだけでなく、どのようにしてピアノ学習を身につけてゆくか、学習の様子を観察する縦断的研究のために、沢山のサンプルが欲しいところである。子どもの場合と違って、学習者たちは多様な人生をそれぞれに送ってきたがゆえに、一般的なシニアの傾向というものを表しにくい。それゆえ、幼年期や青年期との比較というところまでは、現在の時点では遠い道のりであると思われる。このように成人とくにシニアの音楽学習研究においては、ピアノ学習のニーズに比べて課題が山積みである。元吉ひろみの研究¹においてはエイジングの視点から学習者を60歳以上、本研究においては、ライフスタイルの視点から50歳以上をそれぞれ対象にしているが、どちらの場合も「～歳以上」と全てのシニア世代をひとくりに扱っていることは否めない。曲の嗜好や、器楽演奏の経験、ピアノという楽器への思い、エイジングの度合いなどに加えて、それぞれの世代で得た教育や文化、あるいは社会情勢によって違いがあるのは当然である。例えば10年毎に世代を分けて研究する必要があるだろう。発達心理学においても乳幼児や青年期と違って、老年期の研究については完璧にはなり得ないという。それでも老年期の研究がここ約20年でかなり充実したものになってきたことを考えると、シニアのための音楽教育がいかに後回しにされて、単なる「楽しみ」のレベルに甘んじている状況かがうかがえる。とにかくまず、音楽能力におけるシニアの全体像を概観できるよう努力を続けたい。

今回の研究において、アンケートに答えて下さった方々、またその手続きにご尽力下さった各楽器店の方々、3回のテストを受けて下さったシニアの学習者の方々に感謝申し上げます。

資料1 学習者へのアンケート

1. あなたの年齢： 歳 (←必須) 性別： 男・女 (←必須)

1. 子ども時代にピアノを習ったことがありますか？
はい いいえ

「はい」と答えた方→ 歳 ~ 歳まで

「いいえ」と答えた方↓

習い始めた年齢 歳

ピアノ歴(中断期間があればそれも含めて) 年 ヶ月

独習期間があった場合は 歳ごろ ~ 歳くらいまで

2. ピアノを習おう(または再開しよう)と思ったきっかけはなんですか？

(2つまで選択)

- ① 家にピアノがあった
- ② ずっと前から習いたかった
- ③ 人に影響された(友人 家族 その他)
- ④ 習っている人に誘われてその気になった
- ⑤ 脳や手指の活性化のため
- ⑥ その他()

3. ピアノを学習すると決める前までは、どのようなイメージがありましたか？

(1つ選択)

- ① 弾けるかどうか不安があった
- ② 音符が読めるかどうか不安があった
- ③ 名曲を弾く自分を想像した
- ④ 人に聴かせる自分を想像した
- ⑤ その他()

4. 習い始める前と後ではピアノ学習に対するイメージが変わりましたか？

変わった 変わらない

「変わった」と答えた方、それはどう変わったのですか？

(1つ選択)

- ① 難しい
- ② 思っていたよりは簡単
- ③ つまらない (次ページへ続く)

- ④ 素晴らしい
- ⑤ 楽しい
- ⑥ 練習が嫌い・面倒くさい
- ⑦ その他

5. ピアノに関して目標や目的がありますか？ ある ない

「ある」と答えた方、どんな目標(目的)ですか？

(3つまで選択)

- ① ストレス解消・癒し
- ② 自己実現
- ③ 自分だけの世界・楽しみ
- ④ 生きがい
- ⑤ 生活の潤い
- ⑥ 舞台上で発表したい
- ⑦ 誰か(具体的に)と一緒に音楽を楽しみたい
- ⑧ 歌や楽器の伴奏をしたい
- ⑨ ピアノを教えるようになりたい
- ⑩ その他()

6. ピアノを習うことで、何を身につけたいですか？あるいは

何が身につくとおもいますか？

(3つまで選択)

- ① 集中力
- ② がまん強さ
- ③ リズム感
- ④ 音感
- ⑤ 拍子感
- ⑥ 音痴の解消
- ⑦ 表現力
- ⑧ 積極性
- ⑨ 知性
- ⑩ 生活の規律・習慣
- ⑪ その他()

7. 練習の頻度をお答えください

- ① ほぼ毎日

- ② 週に数回（数日）以上
- ③ 週に1、2回（1～2日）
- ④ レッスン当日の直前に少しだけ

8. いくつか実際に弾きたいと思っている曲は何ですか？（いくつでも）

その（それらの）曲はあとどのくらいレッスンを続ければ
弾けるようになると思いますか？
年 ヶ月

9. どのくらいピアノを続けたいと思いますか？

（1つ選択）

- ① できるだけ長く
- ② まず半年続けてみる
- ③ まず1年続けてみる
- ④ いつやめるか考えている
- ⑤ 数年経ったらやめる

10. 自宅での練習に使用しているピアノの種類をお答えください

（1つ選択）

- ① グランドピアノ
- ② 縦型ピアノ
- ③ 電子ピアノ
- ④ キーボード
- ⑤ 持っていない
- ⑥ エレクトーン
- ⑦ その他

11. ありがとうございます。ピアノレッスンについて何か思うところが
あれば書いてください（裏面使用）

音楽テスト

1-a 2つの音を続けて鳴らします。後で鳴らされた音は初めの音より高いですか？低いですか？
それとも同じですか？

1-b 2つの三和音を続けて鳴らします。1つ目の和音から2つ目の和音へ移るとき、
和音の真ん中の音は上がりますか？下がりますか？

1-c 5つの音を続けて鳴らします。何番目の音と何番目の音が同じ音ですか？

1-d 初めに音をひとつ鳴らします。その後に変えられるメロディーの中に、初めの音は何回
できますか？

3

1-6 次に奏されるメロディーの最後の音は、最初の音より上がっていますか下がっていますか？ 同じですか？

1

2

3

1-1 二重音を2つ鳴らします。1回目と2回目ではどちらが音程が離れていますか？

1

2 次に奏される2つのメロディーは同じですか？違いますか？

1

2

3

3 次に明かされる2つのリズムは、同じですか？違いますか？

1

2

3

4

5

6

4 次に奏される曲は何拍子ですか？

- 1. モーツァルト トルコ行進曲
- 2. ショパン ノクターンop. 9-2
- 3. ジャズピアノよりウサギキーングベースの練習曲1

図版出典

図1-10および資料1、2は全て執筆者による作成。

注

- 1 昭和37年4月「ピアノのおけいこ」として開始される。のちに「ピアノとともに」に改編され、その後は視聴者を成人にまで広げ、「NHK趣味百科」(1991年4月～)や「NHK趣味悠々」(1997年4月～)などの趣味講座番組シリーズのなかのひとつや、単独の番組として現在も放映されている。
- 2 元吉ひろみ「高齢者のためのピアノ教育メソッド——理論と実践からの構想——」 聖徳大学大学院平成17年度修士論文、2005年。
既にピアノ教師として長年の経験を積み、60歳以上のピアノ学習者の現状から13の仮説を立て、高齢者の特性を生かした学習の仕方を、他の世代との実践比較と理論から考察し、相応しい教育内容の提案と構想したテキストを提示した。
- 3 橋本晃一『おとなのためのピアノ教本1～4』ドレミ楽譜出版社、1992年。
橋本は「はじめに」の部分で以下のように述べている。「……本書のカリキュラムを組むにあたっては、手にはいるかぎりの資料を集め、比較研究いたしました。中でも、座右の書として特に参考にしたのは次の各教本です。J. Bastien; *The Older Beginner Piano Course*(バスティン・年長者のためのピアノ入門) F. Beyer; *Vorschule im Klavierspiel* (バイエル・ピアノ教則本) J. Tompson; *Adult Preparatory Piano Book* (日本語未出版) J. Tompson; *Modern Course For The Piano* (トンプソン・現代ピアノ教本)……」しかし、上記に挙げた4冊のテキストのうち、成人用は2冊のみであり、4冊以外の資料について、ここでは不明である。後出注17で列挙した橋本以外によるテキストについては、参考テキストすら明らかではない(なおトンプソンの原書楽譜では、トンプソンの綴りが Thompson と表記されている)。
- 4 山内光哉「人生全体からみた青年期以後——生涯発達の段階——」『発達心理学 下 青年・成人・老年期 第二版』山内光哉編、ナカニシヤ出版、2001年、3頁。
山内は「初版へのまえがき」のなかで以下のように述べている。「……社会の進展に応じて成人たちの生活も急速に変わり、そのための心理的諸問題も云々されるようになり、また一方では、高齢化社会を迎えつつある現在、発達心理学の研究が、青年期を超えてさらに成人期・老年期に力を注がなければならないのは当然である。近年、生涯教育の必要性を説く声も高くなっているが、いわゆる中高年の心的発達の可能性が十分把握されていなければ、そのことは単なる政策上の画にかいた餅に終わる危険性もなしとしない。そのようにならないためには、中高年の心身の状況と学習可能性を実証的に明らかに把握しなければならないという立場で本書は

書かれた。……」

- 5 日本女子大学 Cognitive Gerontology 研究会編『老年認知心理学への招待』 風間書房、2006年。
Cognitive Gerontology 研究会代表の小山高正が「まえがき」にて述べている。なお「Cognitive Gerontology」は須賀哲夫日本女子大学教授によるもの。
- 6 前出注3、9頁。
「ここでの、段階区分は一応のもので、それ自身厳密な意味を持つものではない。言い換えれば、説明的な概念としての段階の概念ではなく、記述的な概念にすぎない」としている。
- 7 権藤恭之、石原 治、中里克治、下仲順子、Poon, L. W. 「心的回転課題による高齢者の認知処理速度遅延の検討」『心理学研究』69-5、日本心理学会編、岩波書店、1998年、393-400頁。
- 8 権藤恭之「シニアライフ研究の方法——高齢者対象の心理学研究——」『シニアライフをどうとらえるか研究の視点と提言』 柿木昇治、山田富美雄共編、北大路書房、1999年、38頁。
- 9 斎藤茂太監修、シニアプラン開発機構編『現代サラリーマンの生活と生きがい』 ミネルヴァ書房、1993年、3頁。
ここでは、概ね50歳以上の企業在職者と企業退職者を「サラリーマンシニア」、35～44歳までを「サラリーマンシニア前期」と呼んでいる。
- 10 前出、4頁。
- 11 『定年到達者等の就業と生活実態に関する調査研究』(財) 高齢者雇用開発協会、1994年。(日本能率協会総合研究所 浅田昭司『なるほどマーケティングデータブック シニア編』 スタープレス、2000年、152頁に所収)
- 12 定年が60歳に義務付けられたのは1980年のことである。
- 13 神代和欣『定年到達者等の就業と生活実態に関する調査研究——第一次報告——(14年度)』(財) 高齢者雇用開発協会、2002年、196頁。
- 14 『レジャー白書2006』(財) 社会経済生産性本部、2006年。
- 15 前出、117頁。
- 16 インターネット検索エンジン google [<http://www.google.co.jp/>]による。ちなみに「音楽教室」415万件、「こどもの音楽教室」3万1,800件(「子どものピアノ教室」の約2倍)、「大人の音楽教室」2万7,500件(「大人のピアノ教室」の約2倍)であった。
- 17 『音楽大事典』 平凡社、1981年、467頁。
- 18 絶版になったが書店に在庫が残っていたものなども加えてある。順不同。
an弾手『お父さんのためのピアノ教室 体験的コード奏超入門』ドレミ楽譜出版社、2004年。
原礼彦『いきなり弾けるぞ 大人のためのピアノ教室 初・中・上級編』サーベル社、1993年。
北村智恵『おとなたちの今からピアニスト』東亜音楽社、1994年。
北村智恵『ミドルエイジの今からピアニスト』音楽之友社、2004年。

- 坂東貴余子、本間正治 『おとなのためのバイエル教本』 ドレミ楽譜出版社、1986年。
- 橋本晃一 『おとなのためのピアノ教本1〜4』 ドレミ楽譜出版社、1992年。
- 橋本晃一、大岩佳子 『シニアピアノ教本1〜3』 ドレミ楽譜出版社、1997年。
- 遠藤蓉子編著 『おとなのためのポピュラー・バイエル1〜3』 サーベル社、1997年。
- Well Piano 著 『大人のためのピアノ教本 はじめてのやさしいピアノ ビギン編』 リットーミュージック、2003年。
- ヤマハミュージックメディア編著 『大人のためのピアノ 悠々塾 入門・基礎・初級・中級1・2編』 ヤマハミュージックメディア、2000年。
- 成田剛 『大人のピアノ・スクール ピアノ入門』 成田音楽研究所、2002年。
- 成田剛 『ピアノの喜び1 中高年からピアノを始める人に贈る』 音楽之友社、1997年。
- 松本美代子 『片手から始める大人の楽ピアノ教本 基礎編』 まつもとミュージック、2003年。
- 金野節子 『これでだれでもピアニスト ほんとはじめてのピアノ教本』 ドレミ楽譜出版社、1994年。
- トーオン編作 『これならひとりでマスターできる 大人のための独習バイエル上・下』 ヤマハミュージックメディア、2002年。
- 角聖子 『ブラインドタッチで弾ける おとなのための楽しいピアノスタディ1〜3』 音楽之友社、2004年。
- カワイ音楽教室編 『サウンドファン・ポピュラーピアノ1〜6』 カワイ出版、1993年。
- 19 Waddell, K. J. & Rogoff, B., 'Effect of contextual organization on specific memory of middle-aged and older woman', *Developmental Psychology*, vol.17, Washington, D. C.: American Psychological Association, 1981, pp. 878-885.
- 20 ロザムンド・シューター 『音楽才能の心理学』 貫行子訳、音楽之友社、1986年。
標準化された各音楽テストの結果が何に起因し、どのような諸能力と相関するか、様々な研究を列挙し解説している。この書を参考に今回のテストを作成した。
- 21 摂陵中・高等学校と向陽台高等学校を併設する学校法人が、学内で実施していた18歳以上対象の公開講座。2006年3月に全講座廃止となり、「ピアノを弾こう」もそれと共に終了した。
- 22 橋本晃一、大岩佳子 『シニアピアノ教本1〜3』 ドレミ楽譜出版社、1997年。
- 23 重野純 「第3章 音の世界の認知」『音の世界の心理学』 音楽之友社、2003年、19頁。
- 24 Cohen, J., Hansel, C. E. M. & Sylvester, J. D. 'A new phenomenon in time judgment', *Nature*, London: Macmillan Journal, vol. 172, 1953, p. 901.
Cohen, J., Hansel, C. E. M. & Sylvester, J. D., 'Independence of temporal auditory judgments', *Nature*, London: Macmillan Journal, vol.174, 1954, p. 642.
- 25 Santrock, J. W., 'Adult development and aging',

Dubque, IO : WmC. Brown, 1985.

今泉信人、南博文監訳 『成人発達とエイジング』 北大路書房、1992年、203頁。

- 26 Schaie, KW & Willis, SL, 'Can intellectual decline in the elderly be reversed?', *Developmental Psychology*, vol. 22, 1986, pp. 223-232.
- 27 Cattell, *Abilities*, Boston: Houghton Mifflin, 1971.

■執筆者について

古庵晶子(こあん・あきこ)

大阪音楽大学音楽学部器楽学科ピアノ専攻卒業。同大学音楽学部音楽専攻科(ピアノ)修了。神戸大学大学院教育学研究科音楽教育専攻修了。現在、甲南女子大学人間科学部総合子ども学科および園田学園女子大学人間健康学部幼児教育学科各非常勤講師。研究分野は成人の音楽教育およびピアノ演奏。

E-mail: n18stage@mx3.canvas.ne.jp

■Notes on the Contributor

Akiko Koan gained BA in Music from Osaka College of Music. She finished the postgraduate course in Osaka College of Music. She completed her MA thesis in Music Education at the Graduate Schools of Education of Kobe University. She is a part-time lecturer at Konan Women's University and Sonoda Women's University. Her research field is Music Education for Adult. She also teaches and performs the piano.